

ムラサキツバメは幼虫がマテバジイ、シリブカガシというカシの仲間を食べる暖地性のチョウで、近年の地球温暖化のせいと、マテバジイが街路樹として広く植栽される風潮も追い風となって、現在は神奈川県にはほぼ定着し、千葉県から茨城県にまで進出している。♂はほとんど輝きのないぶい黒紫色で、♀はきれいな青紫に輝く。はねの形は、チョウ愛好家が必ず魅了されるゼフィルスという仲間とそっくりで、ゼフィルスの定義には「卵で越冬する」というのがあって、成虫で越冬するムラサキツバメはその条件から外れてしまうのだが、ゼフィルスがない高知市で育った筆者は、勝手に南国のゼフィルスと呼んでいる。



ムラサキツバメ♂
Nov.29,2008
和歌山周参見町



Jan. 4, 1979 高知市五台山
ムラサキツバメ♀

さて、その越冬だが、不思議なことにムラサキツバメは例外なく複数頭が身体を寄せ合うようにして集団越冬をする。筆者の古い記録では、ウチムラサキという葉っぱが大きなミカンの種類で毎年、ほぼ同じ場所が多い場合 20 頭ほどが、身体を少し斜めに傾けた状態でまさに寄り添うようにして冬の寒さをしのいでいる観察例がある。集団の雌雄構成比はほぼ 1:1 で、暖冬の暖かい日中にはつい飛び出してきて日向ぼっこを楽しむ個体もみられた。1979 年 1 月にはハマユウの分厚い葉っぱの陰で集団を形成するようすも観察できた。写真でわかるように、前翅を後翅の間にすっぽりとうずめこんで、本当に深い眠りにについているように見える。冬を成虫で過ごす近縁のムラサキシジミではこのように集団化することはなく、その違いが何なのか良く分からない。こうした集団越冬はテントウムシやカメムシの仲間でも多く見られる習性で、いったいどのような信号を発し合って集まるのだろうか。



ムラサキツバメ集団越冬
(ウチムラサキ)

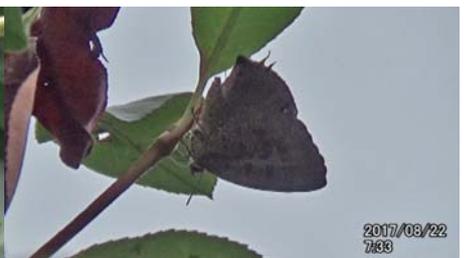
Jan. 1, 1979 高知市五台山



ムラサキツバメ集団越冬
(ハマユウ)

Jan. 1, 1979 高知五台山

2004 年の 6 月、ホシミスジの観察目的で高砂市西畑の斎場庭園まわりをチェックしていたとき、いきなりマテバジイのあるブッシュ近くにムラサキツバメが飛来したが、カメラのフォーカスを合わせようとしている間にすぐ飛び去ってしまった。斎場内にはマテバジイがたくさん植栽されており、その後も何度か観察に出向いたがムラサキツバメには会えないまま。そして 13 年後の 2017 年 8 月、自宅近くのアカメモチ周りにやってきた個体を撮影記録できたが、翅表を



みるチャンスがなく♂♀の判別はできていない。